

代、利子、及び利潤を支拂ふ。が消費者としての彼は、再び分配者の爲めに地代、利子、及び利潤を支拂ふのである。正統派經濟學者は、此二様の經濟的誅求を全然混同して居る。彼等は分配の經費は、生産費目の中に算入せらるべきであり、分配の機關は、仔細に解剖すれば、生産の機關の一部であると主張する。故に、若しも社會が土地及び機械を所有管理する曉には、現在の分配機關をも引繼かねばならぬと説くのである。大抵の國家社會主義者は、此處で甘くも巽にはまり込むに相異なる、何故ならば、彼の社會觀は總ての機關を其資本價値で買収し、其資本價値に對する利子——國家に依て保證せられたる利子——を支拂ふことを豫想して居るからである。然るに貸銀無き限り地代も無く、利子も無く、利潤もあり得ないのであるから、吾人が先に示した通り、此方法は當然貸銀制度の繼續を伴ふものである。そこでギルド主義者及びサンディカリストは共に、斯様な解決は凡て、現存の産業組織の單なる皮相的變形を意味するに過ぎず、貸銀制度にして全廢せられざる限り、何等の根本的變化も無いことを認めて居るのである。實際、現在の經濟組織に於ける分配の要素は、生産者の眞の利益を助ける所か、生産的資本家を事實上脅喝して、彼等から剩餘價値の最高額、即ち其れ以上取られては製造業者が立行かないといふ點まで、絞れるだけのものを絞り取つてしまふのである。若し脅喝取財が其處で留まつたならば、吾人は正統派經濟學者の説を容れて、生産上の資本家と分配上の資本家とは、同體同頭にして、只だ二頭を有するに過ぎざるものだと考へて置ても宜いのである。然しながら、事實は斯様に手軽に假定を決して許さない。之には二つの理由がある。即ち其一是、造られたる富の所有權は、生産者より分配者へ、製造家より商人に移る。

のである。其二是、分配者は、生産者より所有權を引繼いた上、猶引續いて消費者を脅喝して誅求するのである。どうしてそれが出来るか。其理由は歴史に深く根ざして居る。銀行家と提携して居る今日の商人は、(以前には彼等は、一人にして兩者を兼ねて居た)大昔の最初の企業家の直系の後裔である。往時、資本を持たぬ家内工業者の生産物に對して現金を支拂ひ、事實上『部分々々を集め』自分の所有する販賣機關を通じて直接に、又は地方の商人を通じて間接に、消費者に品物を賣ることに依て利益を擧げたのは、即ち彼であつた。今日に至るまでランカシャー及びシンドラント地方と初め、諸方の小製造家は、單に其生産物の分配のみならず、其事業を運轉する資本の上にも、商人の力に頼つて居るのである。概括的に云へば、成功せる製造業者とは、商人の支配を脱した人の謂である。然しそういふ成功を收めんが爲めには、製造業者は生産と分配との双方の要求に應ずべく同等の資本を持つて居なければならぬ。生産の爲めに資本を惹付けけるには、是非共確實な需要の見込がなければならぬ。是が一旦成就せられたならば、銀行家は其自然の盟友たる商人を見捨て、製造家と提携するのである。製造家と商人との間に於ける此闘争は、一に此二種の搾取者が、勢力の競賣市場に於て、商品として買はれた勞働の生んだ生産物から、剩餘價値を絞り取る腕前の如何に依てのみ決定せられるのである。此勞働者てふ商品が、往時の奴隸の如く『自分にはもはや商品では無い、自分は生きて居る實體である。汝はもはや私に命令することは出来ない。今後私が生産した物は、私が自分で管理する』と云つた場合を想像せよ。然らば製造家や商人はさうなるであらう。傳説は斯う語つて居る、昔モーゼがエデプトを逃れ出て乾いた土地に達した時、